

傘寿から三年の歩み（稿）

所 功

(tokoroisao.jp)

※「わが八十年の歩み」追補

V 期 終 活 期

令和4年（二〇二二） 81歳

・正月12日、道徳科学研究センターに出勤し共同研究『皇室野史』の再発見」の中間報告を行う。

※『皇室野史』の研究：廣池千九郎博士（一八六六～一九三八）が明治26年（満27歳）京都で「史学普及雑誌」を発行する傍ら、翌年（一八九三）『皇室野史』を出版された。これは武家時代（中世近世）における皇室と国民の関係を説明しようとした鋭い着眼の労作である。その引証史料を再検証するため、橋本富太郎・久禮且雄両氏と三年計画

を立て共同研究を始めたが、私としては道徳科学研究センターで最後の研究発表となった。

※道科研に寄贈した宸翰（後水尾天皇・明正女帝・後桜町女帝・光格天皇の宸筆）の展示：その午前、正副理事長から感謝状を頂き、記念館で展示品を解説した。

・3月19日、大垣北高の多機能教室寄贈記念式典に出席し、午後、汗青会公開セミナーで講演する。

※寄贈記念式典：母校に寄贈した最新の多機能教室を見学してから、国の紺綬褒章と県の感謝状を頂く式典に出席し、教職員と生徒会役員らと懇談した。

※汗青会セミナー：大垣市サイトピアセンターで第11回セミナーを開き、「梁川星巖と紅蘭―おしどり夫婦の功績」について講述した。橋本秀雄幹事の尽力により講録冊子も発行した（五月）。

・3月31日、モラロジー研究所教授を退任する。

※研究所教授：平成24年4月から十年間在任したモラロジー研究所（令和三年からモラロジー道徳教育財団と改称）の道徳科学教育センター教授（八年間専任、一二年間客員）を定年で退任した。
橋本富太郎・久禮且雄両氏の尽力により『モラロジー研究』八八号で「傘寿記念特集」が生まれ、拙稿「奉職十年の歩み」も掲載された。

・4月6日、大阪倶楽部に招かれ「皇室の近未来像を展望する」の題で講演する。その数日後新型コロナウイルス発症（家内も感染）。

※新型コロナウイルス発症：講演会は私も来聴者百数十名もマスク着用であったが、往復の新幹線車中で感染したのか。自宅に籠って20日に全快した。

・6月19日、京都産大「むすびわざ館」で「平成と令和の大礼を振り返る」シンポジウムに出講する。

※シンポジウム：同館主催・日文研協賛で「平成」と「令和」の代始諸儀祭礼につき、私が「外から

学んだ大礼」、楠本祐一氏が「内から支えた大礼」

の題で、講述の後、久禮且雄准教授の司会により質疑応答した。楠本氏は京都西陣生まれ、平成初めに侍従、令和初めに掌典長として大礼に奉仕された貴重な体験を存分に語られた。（『日文研紀要』27号に全容掲載。）

・7月8日、「渡辺允侍従長を偲ぶ会」に参列。

※渡辺允（まこと）元侍従長（85歳）：平成10年（一九九八）に高橋紘氏との共著『皇位継承』（文春新書）を出す前後から何度も招かれ教示を賜わった同氏は、退職後の同23年（74歳）『天皇家の執事』文春文庫版の後書きに、天皇陛下の御心痛を直叙し、皇族女子が結婚後も皇室に留まれる法改正の必要性を明示された。それが実現すれば、満20歳となられた敬宮愛子内親王（3月17日見事な記者会見）などの宮家創立も可能になる。なお、毎日新聞（3月21日朝刊）に求められ追悼記事を寄せた。

※徳ぶ会：2月9日に他界された渡辺允侍従長を偲ぶ会が、御令嬢姉妹の主催により帝国ホテルで開かれ、直会の席で高橋美佐男上皇職侍従次長・羽毛田信吾元宮内庁長官・鷹司尚武霞会館理事長兼神社本庁統理および皇室取材の雑誌社・新聞社・テレビ局の記者たちと立話した。

その懇談中、安倍晋三元首相（63歳）が奈良市西大寺駅前で演説中に銃撃されて心肺停止の悲報に驚嘆した（夕方六時ころ絶命）。

・8月13日、六月大祓お供えの「真桑瓜」を用いた「真桑瓜アイス」を岐阜JAから上皇職に献上する。

※六月大祓の供え物：宮中祭祀の六月末日「大祓」には、御神饌（おすべ）の一部として「白瓜・真桑瓜・茄子」を輪切りにしたものを供えられるという（高谷朝子元内掌典著『宮中賢所物語』参照）。この真桑瓜はメロンの一変種で縄文・弥生時代から食物とされ、特に美濃国の真桑村（現本巢市真桑）の産品が著名となり、全国に流布している。

事』、④9／30所「杉浦重剛の御進講」。

・10月6日、京都市に大垣の有志から「梁川星巖・紅蘭顕彰銘版」寄贈の仲立をする。

※顕彰銘版：霊山顕彰会の岐阜県支部に提案して、京都市役所には美濃部竜治氏（産大卒）から働きかけてもらい、京阪神宮前駅出口に「星巖・紅蘭おしどり夫婦」の顕彰銘版（撰文所功、製作児玉製作所）を寄贈する式典と小宴を実施した（門川大作市長ら十数名来席）。

・12月9日、「東京国立博物館百五十年特別展」を拝観。
※東博の特別展：明治五年（一八七二）の創立から一五〇年の同館所蔵名品（国宝など数百点）の特別展示を見学し、三善清行が伝記を書いた田珍の入唐公験・「智証大師」勅書などに感動した。

令和5年（二〇二三） 82歳
・3月2日、上野の森美術館で「小灘一紀絵画展」を

その真桑瓜は、皇居の畑で栽培されているが、平成三十年（二〇一八）十月、皇后の美智子さまは天皇が譲位されたら赤坂御用地でも「マクワウリを作ってみたい」と述べておられる。

※真桑瓜アイス：このような真桑瓜を地元から献上してもらえないか、岐阜JAの岩佐哲司会長に相談したところ、JA委託の県立岐阜農林高校で創作した「真桑瓜アイス」は、安全で問題がないこと、それならば上皇職でも受納して頂けることが判り、無事献上の夢が実現した。以後毎年六月末に献上している。

・8月17日、双京構想連続講座に京都アスニーへ出講。
※双京構想連続講座：一昨年からの市の総合企画局（京都創生室）の依頼により、京都アスニー大ホールでの「双京構想」連続講座を担当した。今年度は「帝王学の教科書」のテーマで①6／19所「宇多天皇の『寛平御遺誡』」、②久禮「順徳天皇の『禁秘抄』」、③久禮「後水尾天皇の『当時年中行

拝見する。

※小灘一紀絵画展：小灘氏（鳥取県出身、78）は二十年前に日展審査員、長らく日本神話の世界を描き続けてきた。今回も「神々の微笑」と題する特集展が開かれ、同夫人（皇學館大学卒業生）から招待され拝観した。同画伯は今春「日本藝術院賞」を受賞された。

・3月11日、母校の小学校に「二宮金次郎像」の説明銘版を寄贈する。

※説明銘版：明治六年（一八七三）創立から一五〇年の母校（現揖斐川町立の小島小学校）校庭隅に昭和十四年（一九三九）寄贈の二宮金次郎石像がある。その説明銘版「勤・儉・譲の報徳に学ぶ」（撰文所功、ステンレス製、京都の児玉製作所作）を同二十五年入学の同級生一同有志で寄贈した。その整地・設営には、校長以下の教員・児童も保護者会役員・同級生有志も協力された。

- ・ 3月19日、大垣の汗青会公開セミナーに出講する。
- ※汗青会公開セミナー：大垣北高の恩師稲川誠一先生（昭和60年3月20日急逝）に学ぶ汗青会の勉強会を一般も自由参加のセミナーとしてきた。今回は「徳川家康の遺訓を見直す」の題で講述した（四月「ぎふの教育」二〇五号に要旨掲載）。

- ・ 4月16日、小田原文化財団江之浦測候所の「鎮花祭」に参列し、郷里の「さざれ石」を寄贈する。

※江之浦測候所：現代美術作家（日本藝術院会員・文化功労者）の杉本博司氏（昭和23年生まれ）が、平成二十九年（二〇一七）小田原市西郊の太平洋水平線を一望できる江之浦に複合文化施設を開設。その広大な苑内の石舞台において開催の「鎮花祭」で杉謙太郎氏のユニークな「演花」と杉本理事長の感動的な講話などがあった。

ここには昨年「春日神社」が勧請され参道も整備中にて、郷里に近い揖斐川町春日の庭置用「さざれ石」（石灰質角礫岩）を寄進させて頂いた。

- ・ 7月27日、父の八十年祭にちなみ、靖国神社へ家族そろって昇殿参拝する。
- が無くなる』所収の対談に参上し編集を手伝った縁もあって、本書の刊行を引き受けられた。

※父（所久雄）の八十年祭：昭和十八年（一九四

三）七月二十七日、父（満30歳8ヶ月）が戦死してから満八十年の本日、介護を要する妻も一緒に娘夫妻の車で上京。永代神楽申込みの同日戦死者遺族教組と昇殿参拝した後、特別奉納への感謝状を山口建史宮司から授与され、遊就館で展示されている父の遺品などを撮影してもらった。

尚、満27歳で「未亡人」となった母は、平成十九年（二〇〇七）七月十日、満91歳寸前で往生したが、それ以来笑顔の遺影を居間にも掲げている。

- ・ 8月2日、皇學館大学国史学科十期生とコロナ禍で二年遅れの傘寿と稀寿を祝う会に出席する。
- ※十期生：私より十歳若いクラス有志二十一名が近

- ・ 6月23日、JAいび川の女性部セミナーに出講し、その機会に小中学校クラス会にも参加する。

※JAいび川：揖斐郡（揖斐川町・池田町・大野町）全域の農業協同組合。その女性部大学講座に招かれ「徳川家康の家族たち」について話した。

その前に小島小中学校同級生二十二名と北方のカントリー倶楽部レストランで会食し歓談した。

- ・ 6月25日、新著『天皇の歴史と法制を見直す』が、藤原書店から出版される。

※新著：6月9日の今上陛下「大婚三十年」奉祝の思いを込めて昨春から書き進めてきたが、校正に手間どり漸く完成した（四六判四三二頁）。その口絵に藤島博文画伯（日展審査員、82歳）の日本画「令和の大嘗宮」を掲載させて頂いた。

※藤原書店：平成元年（一九八九）藤原良雄社長により創立された出版社。平成24年（二〇一二）市村真一博士著『皇室典範を改正しなければ、宮家

くの湯河原に集い、思い出と近況を語り合った。

- ・ 9月15日・16日、京都アスニーの連続講座と揖斐川町の「学ぶ集い」に出講する。

※京都アスニーの連続講座：「双京構想」を推進する京都アスニーでの連続講座は、今年度「京都ゆかりの歴代天皇」という通しテーマで、初回（8月4日）「平安前期の天皇と京都」、第三回（9月15日）「鎌倉・南北朝の天皇と京都」、第五回（10月27日）「東京時代の天皇と京都」を担当した。

※揖斐川町の「広木忠信に学ぶ集い」：広木忠信（文蔵）の遺徳を偲び郷里の文化を学ぶ有志の集いを昭和五十六年（一九八一）から始め、十年後の平成三年（一九九一）から町文化財保護協会の主催とし、揖斐川歴史民俗資料館で開催してきた。

その参加者が年々多くなったので、今回から揖斐川町民交流センター（はなももホール）を会場とし、町長・教育長も出席された。拙講テーマは「春日局（つぼね）ゆかりの揖斐川町と小田原市」。

・11月25日、名古屋大学文学部の創立七十五周年記念行事に参列する。

※名古屋大学文学部の創立記念：本学は昭和14年（一九三九）最後（七番目）の帝国大学として創設されたが、文学部と法経学部が創立されたのは同23年（一九四八）である。それから七十五年を記念しての式典に国史出身の友らと参列し、記念講演も聴講した。

なお、この機会に文学部図書室の設備を充実するために若干の特別寄付をした。

・12月9日、大阪の国民會館大ホールで「生誕百年の田中卓博士に学ぶ集い」を開催する（一年後、その全容を出版）。

※「学ぶ集い」：田中卓博士は、平成30年（二〇一八）

11月24日に95歳寸前で帰幽された（前記）。その長逝から五年後の本年が生誕百年の節目にあたるので、国民會館（武藤会長）の理解と数名の協力を

に協議を求めた。

それは皇位継承問題を棚上げして、「皇族数の確保」方策のみに絞り、Ⅰ皇族女子が結婚後も皇族の身分に留まりうるようにすること。Ⅱ旧宮家の男系男子が皇族として皇室に入りうるようにすること。Ⅲ旧宮家の血縁者を現皇室と別に皇族とすることの三点から成る。

※冊子『「皇族の確保」急務所見』：このうち、管見ではⅠを是認するが、Ⅱも黙認し、Ⅲは否認する。ただ、Ⅰの案で皇族女子を当主とする新宮家に入る夫も子孫も皇族にしない（一般国民のまま）という政府案は不自然で不適切と考え、是正を求めている。

それをホームページで八月まで論じた二十篇と令和三年（二〇二二）の有識者会議ヒアリング記録、および他紙誌の取材に応じた六篇を併せ、『皇族の確保』急務所見』と題する冊子（A5判一六四頁）を自費出版し、関係各位に贈呈した。

えて博士に学ぶ集いを開催した（講師は武藤治太・岡田登・清水潔・若井勲夫と私。進行司会は野崎眞夫・橋本秀雄の両氏）。

※全容の出版：その全容は、武藤会長の高配により、事務局と野木邦夫の尽力を得て、翌6年11月24日「国民會館叢書」別冊（A5判一四〇頁）として刊行し、四百名近くに寄贈・頒布した。

令和6年（二〇二四） 83歳

・正月6日、「皇族の確保」に関する政府案を国会の与野党で協議している動静に注目し、ホームページなどに管見を出し続け、冊子『皇族の確保』急務所見』を自費出版する。

※政府案：平成29年（二〇一七）天皇の高齢による譲位を可能にする「皇室典範特例法」を制定した際の「付帯決議」を承けて「安定的な皇位継承」と速かな「女性宮家の創設」に関して検討する有識者会議の報告に基づいた応急の案が作成され、政府（岸田文雄首相）から国会（与野党・党派）

・2月13日、杉浦重剛翁の百年祭により、伝通院へ御遺族と共に御墓へ詣り、御遺品などを見せて頂く。

※百年祭：杉浦重剛（号「梅窓」「天台道士」）は、百年前の大正十三年（一九二四）二月十三日、満68歳で他界し、菩提寺の伝通院（小石川、浄土宗）に葬られた。以後ご遺族（現当主は曾孫重利氏）と「日本中学校」（現在「日本中学・高等学校」）の同窓生などにより「梅窓祭」が行なわれており、私も昨年から参列している。

※御遺品：杉浦翁の資料は殆ど日本中学・高等学校に寄贈保管されているが、ご遺族のもとにある揮毫の色紙や貴重な写真を拝見させていただいた。

なお、この機会に平成二十一年（二〇〇九）に編刊したものを補訂改装して、七月末『教育勅語―少年昭和天皇への進講録―』（四六判一七四頁。杉浦重剛著・所功解説、勉誠社）を出版した。

・3月17日、白鳥神楽保存会から委嘱された『白鳥の歩み』の編集会議に出た後、汗青会の公開セミナーで

その中間報告を行う。

※**白鳥神楽保存会**：郷里に近い揖斐郡池田町の白鳥神社（主祭神倭建命）には、江戸時代から獅子舞の神楽が盛んで、今も春秋の例祭に悪魔祓などを奉仕している。その保存会長河本克己氏は、私の母方の分家当主である。また同会役員の高崎美恵子様は「白鳥奉燈狂俳保存会」の会長でもある。

※**『白鳥の歩み』**：この機会に「白鳥神楽の由来」だけでなく、「白鳥地区の来歴」と「白鳥神社の由緒」および「白鳥狂俳の奉燈」についても可能な限り調べ、九月の例祭までに冊子『白鳥の歩み』（B5判一―四頁）を仕上げ奉納した。その口絵には小灘一紀画伯（80歳）作「ヤマトタケル」を掲載させて頂いた。

・7月12日、京都アスニーの連続講座に出講した際、古書店から購入予定の鈴鹿家旧蔵文書を確認する。

※**連続講座**：今年度はNHK大河ドラマ「光る君へ」にちなみ、「皇室と貴族の関係」を通しテーマとし

て、その初回「平安中期の朝廷と撰閲家」を担当した。

※**鈴鹿家旧蔵文書**：京都の思文閣出版の古書目録で知った文書群のうち、江戸時代の鈴鹿家が奉仕した大嘗祭関係史料を私費で一括購入して、皇學館大学の神道博物館に寄贈した。

・9月28日・29日、揖斐郡大野町「文化財保存協会」の記念講演に参り、翌日揖斐川町の「広木忠信に学ぶ集い」で講述する。

※**文化財保存協会**：大野町では同会の創立五十年を迎え、杉原重明会長（汗青会同学）の依頼により町民センターで「近世大野における学問と教育の再発見」について講演した。

翌日、揖斐川町の交流センターで「昭和天皇から三代続く谷汲行幸啓」につき講述した。

・10月5日、九月刊行の新著『「天皇学」入門ゼミナール』をふまえて、國民會館の東京講座で、「天皇史

から「天皇学」への展望」につき講述する。

※**新著**：平成二十一年（二〇〇九）モラロジー研究所から出版した『歴代天皇の実像』の本文を全面的に更新し、久禮且雄氏に近年の研究動向を「補注」して加えてもらい、藤原書店から刊行した。

※**「天皇学」**：拙著の中心は「天皇史」であるが、藤原社長の提案により「天皇学」という壮大な新語を掲げた。その発展構想と最近の皇室問題を、東京の国際文化会館で開催された講座で論述し、要旨を國民會館のメールマガジンに掲載した。

・11月9日、藝林会学術大会に顧問として出席し、その会員総会で平泉隆房会長の急逝による新会長として植村和秀副会長の就任を提案し承認をえた。

終了後、日本学協会役員の平泉紀房新理事長および小村和年常務理事も交えて、今後の在り方などを協議した。

※**藝林会学術大会**：平成十八年（二〇〇六）時野谷滋博士（82歳）の他界により藝林会の会長を引き

受けた私は、会誌『藝林』充実のためにも、委員数名の協力をえて、翌年から毎秋、学術大会を企画し開催してきた。

※**平泉隆房会長**：隆房氏（澄博士の嫡孫）は、皇學館大学文学部・大学院を出て「中世伊勢神道の研究」で学位を授けられ、金沢工業大学の教授と白山神社の宮司を兼ね、令和元年（二〇一九）から藝林会の会長として積極的に尽力されたが、今年八月十六日に急病で帰幽された（満70歳）。

※**植村和秀新会長**：同氏は（京都産業大学教授）は、京都大学法学部出身の政治思想研究者で、平成十六年（二〇〇四）『丸山眞男と平泉澄』（柏書房）を出版し、同二十六年の藝林会学術大会では「滞欧研究日記にみる平泉澄博士」について研究発表された（全文『藝林』六四巻一号所載）。そのような縁で隆房会長から副会長を委嘱され、今回新会長就任を承諾された。

※**日本学協会の役員**：当会は昭和三十一年（一九五六）文部省学術局所管の一般財団法人として設立され

た。その理事長は、このたび平泉澄博士の曾孫紀房氏（金沢工業大学講師）が就任された。

なお、国際的な経済学者の市村真一博士は、長らく日本学協会の顧問を務め、会誌『日本』（月刊）の編集にも尽力されてきたが、今年七月三日長逝された（満99歳）。

・11月24日、「都草」の「京都御所・御苑歴史散策ツアーガイド」十周年記念講演を行う。

※「都草」：平成十六年（二〇〇四）から京都商工会議所主催の「京都検定」上級合格者を中心に、京都の歴史・文化を学ぶ会として作られたNPO法人である。その有志たちが、京都御所と京都御苑を案内するボランティア活動を続けている。

※記念講演：京都産業大学在職中、京都検定の一級合格者を日本文化研究所で受け入れ、私も研究サポートしてきた。その縁で「都草」初代会長坂本孝志氏に依頼され、立命館大学朱雀キャンパスホールにおいて「京都御苑の真価をみんなで見え」

と題し講述した。その前に文化庁の今泉柔剛審議官などの祝辞があり、環境省の小口陽介京都御苑管理事務所長の御苑紹介もあった。

・12月25日、本日は大正天皇（77歳）の崩御により、皇太子で摂政の裕仁親王が践祚されてから九十九年目。この機会に春から「昭和天皇記念館」をリニューアルする寄附金の募集事業が行われ、賛助する。

※昭和天皇記念館：昭和天皇の在位五十年に設置された「国営昭和記念公園」（立川市）の一角にその御事績を広く伝えるため、平成十七年（二〇〇七）この記念館が創建された。

※募金事業：この記念館を二十年後の来年（昭和百年）に大改修するため、クラウドファンディングにより寄附を募ることになり、梶田明宏氏（現館長、『昭和天皇実録』編纂官）から依頼を受け、呼びかけ文を寄せ応分の協賛をした。

（以上）

令和7年（二〇二五） 84歳

・正月7日、『昭和天皇実録』などを読み直し、「昭和百年」にちなみ、今日から「大御歌に観る昭和天皇の歩み」を執筆し始める。

※「昭和天皇の歩み」：四月から『日本』に連載。



HP : tokoroisao.jp (かんせいPLAZA)
E-mail : 12.tokoko.12@gmail.com

〈付 記〉
新年のご挨拶を申し上げます

“終活”の充実

かんせいPLAZA主筆 所 功

令和七年（2025）の初めを寿ぎ、あらためてご交誼をお願い申し上げます。

はや日本人の平均寿命を越えましたが、今のところ健康に恵まれていますので、先般来 “終活” を心がけています。

それは単に最期の準備だけでなく、自宅の蔵書（大半は研究所に寄贈済み）や資料（来信・切り抜き・コピー等）を分別・処理すると共に、残したものを活用し新しい情報を集めて、現在と将来のため為すべきことに取り組む試みです。

しかし、その多くは一人では為しえず、身近な家族や志を同じくする知友たちの協力をえなければなりません。このホームページもその一つです。

月刊『歴史研究』連載中の巻頭随想「いま伝えたいこと」は、転載欄に添付します。併せてご覧いただけたら幸いです。